さんにち NIE ワークシート

山梨日日新聞

年　　組　名前：

ごみゼロ 小瀬から世界へ

VF甲府 リユース食器20年

気候変動 私たちにできること《2》

VF甲府が試合会場で導入しているリユースカップを手に、スタジアムで取り組む意義を語るスペースふうの永井寛子理事長＝富士川町天神中条

昨年12月12日、タイ・ブリラムのスタジアムで、サッカーJ2ヴァンフォーレ甲府（VF甲府）の選手とサポーターは歓喜に沸いた。各国の強豪クラブが名を連ねたアジア・チャンピオンズリーグ（ACL）で1次リーグ突破。地方クラブが成し遂げた快挙を、アジアのサッカー界は驚きを持って受け止めた。

実は5年前、VF甲府は地球温暖化対策で、その名を世界に発信していた。

2018年12月11日、ポーランド南部の工業都市・カトウィツェに、VF甲府ゼネラルマネジャー（現社長）の佐久間悟さんの姿があった。国連気候変動枠組み条約第24回締約国会議（COP24）で行われたパネルディスカッションで、VF甲府の地球温暖化対策の取り組みを講演した。

スポーツチームの活動には、各国の代表から「明確な意思が伝わるメッセージ性のある取り組み」などと高く評価されたという。佐久間さんは「資金力の少ないクラブでもスポーツの力で社会、環境にいい影響を与えることができる」と力を込める。

デポジット

COP24のパネルディスカッションで紹介したのは、本拠地の甲府・JITスタジアム（小瀬スポーツ公園陸上競技場）で続けてきた「エコスタジアム」の取り組みだ。

04年に認定NPO法人「スペースふう」（富士川町）の協力で、再利用できるリユースカップを導入。昨年でちょうど丸20年が経過した。飲料購入時に100円を預かってカップ返却時に返金する「デポジット」制で、昨年は試合開催時に4カ所のエコステーションが設けられた。

VF甲府でリユースカップを担当する渡辺敬太さんは「来場者から特別な反応はない。それはこれまで時間をかけて取り組み、当然のことになってきた証拠」と語る。

導入のきっかけは会場のごみ問題。経営危機を乗り越え、観客が少しずつ増えると、試合後に食品や飲料の空き容器がごみ箱からあふれた。そんな時にスポンサーのはくばく（中央市）を通じ、スペースふうからリユースカップ導入の提案があった。

累計108万個

04～23年のリユースカップの使用数は累計108万個。二酸化炭素（CO_2）排出量を83トン削減し、スギの木が1年で吸収する量に換算すると約6千本に相当する。

スペースふう理事長の永井寛子さんは「VF甲府を通じて、来場者の環境意識を生むことにつながった」と感じている。VF甲府は自然エネルギーで発電したグリーン電力を照明などに使う試合も開催し、アウェーサポーター向けの電動バイクを使った県内周遊観光の企画を試行。CO_2削減対策の新たな施策の「日常化」も目指している。

渡辺さんは「CO_2削減の取り組みが金銭的にも事業として成り立つよう、スタジアムで施策を講じていかないといけない」と強調する。スポーツクラブならではの温暖化対策、ごみゼロのスタジアムの創出へ。小瀬から世界に向けた発信は続く。〈雨宮丈貴〉

（2024年1月4日付 山梨日日新聞18面）

問1
昨年から続くACLで躍進しているVF甲府は、5年前に、なにの対策で、その名を世界に発信していましたか。

……

問2
佐久間社長は、海外のなんという会議で、VF甲府の取り組みを講演しましたか。

・……

……条約

……会議

問3
VF甲府が本拠地のスタジアムで行っている「デポジット」制とは、どのような仕組みか、具体的に説明してください。

……

問4
いままでにリユースカップは、累計で何個利用され、どれだけの成果がありましたか。

・利用数：……個

・成　果：……

……

教育目的以外の無断転載 複製および頒布は禁止します
Copyright © 2024 山梨日日新聞社 THE YAMANASHI NICHINICHI SHIMBUN.